

四手井先生を送る ―もう一度話をしたいと想いつつ―

名古屋大学名誉教授・国民森林会議会長 只 木 良 也

四手井綱英先生が、農林省林業試験場（現森林総合研究所）から、京都大学農学部林学科教授に転じられたのは、昭和29年冬のことでした。着任先の講座名は「造林学講座」、この講座名は後年、「森林生態学講座」と改称されます。それは、造林学の基礎は生態学であるという先生の信念に基づくものでした。

新任の四手井教授が、翌春から指導を担当して卒業論文を書かせた第1期生は4名、その中の一人が私でした。植栽密度の違いが樹木の生長に及ぼす影響の実験がテーマでした。修士課程では単植えの効果とくに他種との競争緩和、博士課程では密度効果をベースとして様々な間伐コースと収穫量を相互比較、が私に与えられたテーマで、いずれも先生が当時興味を持っておられた課題でした。おかげで、先生との連名による論文が何本も

生まれました。後に、お酒好きであった先生のお相手をしながら、「農林省の研究所から、勝手の違う大学に来て戸惑う先生に、学生の指導は斯くあるべしと、自らモルモットの役となったのが私たち」と言いますと、先生も「そ～や、そ～や」と応えてくれたものでした。

密度効果は、そもそもは大阪市立大学の吉良竜夫先生グループの業績でしたが、草本を用いて明らかにされた法則を、木本群落に適用したのが四手井先生でした。山岳会を通じて旧知のお二人のご親交は、密度効果のみならず、森林の生産構造・物質生産・物質循環の調査研究で大きく花開くことになります。この二人の研究室に、東京大学佐藤大七郎先生、北海道大学館脇操先生の研究室を加えた「四大学合同調査班」は、昭和33年の北海道の針葉樹林の調査を皮切りに、全国に調査地域を拡大しました。

こうした調査を通じて大成された調査方法は、その10年後に開始された国際生物学事業計画（IBP）、すなわち地球上の生物資源の実態を把握しようとする国際共同調査で、世界をリードしました。実際には、森林の現場で、サンプル木を伐り倒し、樹高沿いに一定厚みの何層かに分けて、幹、枝、葉の重量を計る、根も掘り上げて計量する、といった地道な作業に労力を費やす調査でした。何人もが車座になって、重量測定のために枝から葉をむしり取る作業現場を見て、調査を取材に来た記者の漏らした感想は、「これも科学です



写真1. 京都大学停年講義―比叡山。中央左、マイクを持つのが四手井先生。

か？」でした。20年にも及ぶその積み重ねは、やがてIBP報告書等に集大成され、何篇もの貴重な論文となりました。

四手井先生のご薫陶を、私が直接受けたのは、学部・大学院の6年間でした。しかし、この間に上記研究や野外調査を通じて先生から与えられ、また学んだものは、その後の私の研究活動の基盤となり、論拠となりました。有り難いことだと思っています。それだけでなく、直接指導の立場を離れても、先生にリードして頂くことも多かったのです。例えば昭和46年、環境問題が賑やかになった頃、NHK-TV市民大学講座「環境と人間」に出演依頼があったとき、先生は「私が京都から行くより、東京に便利な奴が居る」と、当時東京在勤であった私を推薦して下さいました。他にも、先生ご関与の委員会等にご推挙いただいた例はいくつもあり、おかげで私の活動の幅は広がりました。私の名古屋大学停年の時には、その記念会に名古屋までわざわざお出かけいただきました。

私はその御恩を、どれだけお返しできたでしょうか。考えてみれば、ほんの一つ二つです。一つは、先生の停年記念会は、比叡山でフィールド講演という森林学者らしいものでしたが、その祝賀会（これは屋内）の司会をさせて戴きました。もう一つは、先生ご他界後の、2010年2月14日の「四手井綱英先生を偲ぶ会」第1部、「先生の偉業を偲んで」語り合う会のこれも司会役、ぐらいのものなのですが。

お酒の好きな先生でした。煙草を手放さない先生でした。話好き、しかし雑談と聞こえるその中に巧まずして真理・信念が含まれているのがしばしばでした。そして、自然は大事、その活用こそ

人間生存の鍵、と説き、学問的な自己の理念は固執する先生でした。今一度、語り合い、叱られてみたい、そんな気持ちで一杯です。

2009年11月26日早朝、四手井先生ご他界。あと4日でお誕生日、98歳になられる直前のことでした。ここ数年、自宅で療養されていたのですが、肺炎のこじれを恐れて入院。その後経過はまずまずで、近々退院予定のところ、急に心臓に異変が・・・。

26日には、ご遺体と面会してお別れをいたしました。翌27日密葬。私はその日、「食とみどり、水を守る全国大会」に招かれて松江まで出掛け、「環境としての森林—その営みから生まれるもの」と題して講演することになっていました。先生の持論に沿ったテーマですし、「約束は優先だ、そちらへ行きなさい」という先生の声が聞こえたと勝手に解釈して、密葬は失礼して、松江に出かけました。

そして講演。冒頭に次のような話を置いて、私は講演を始めました。

昨26日、私の恩師である四手井綱英先生ご他界になりました。今誰もが知っている「里山」の語で知られる先生でした。先般、9月には「これからの日本の森林づくり」（ナカニシヤ出版）を上梓されましたが、それが絶筆となってしまいました。この本には、私たち弟子たちも、加筆させてもらったのですが、その本の表紙の帯に「四手井綱英が言い遺す」とあり、そのとおりになりました。

今日はお弔いの日。しかし私は、約束どおりこちらへ参りました。ここ壇上から先生を偲びながら、話をさせていただきます。お付き合いください。

先生のご冥福を祈ります。

合掌